

食生活は地域によってそれぞれ特色があるため、生活習慣病の発症の仕方も地域によって異なってくるはずである。そこで本論文では、生活習慣病の発症の地域差を調べるとともに、生活習慣病が発症する原因について調べた。本論文では計量経済学的手法を用い、統計を分析することによって先に述べた地域差や原因について明らかにしていく。統計は厚生労働省「人口動態統計」と、同「国民健康・栄養調査」の二つを用いる。人口動態統計には各都道府県で、人々がどのような原因で何人なくなったかが記されている。この統計によると、癌や心臓疾患、糖尿病の死亡率は年々増加している。一方、脳血管疾患や高血圧性疾患の死亡率は年々減少している。国民健康・栄養調査は各地方で、一人一日あたりどのような食品や栄養をどれだけ摂っているかが記されている。この統計によると、肉類、緑黄色野菜の摂取量は増加し続けている。一方、米類やいも類、豆類、白色野菜等の摂取量は減少し続けていることがわかった。以上二つの統計を用いて分析した結果、癌や心臓疾患の発症は食生活の欧米化が主な原因となっているのに対し、脳血管疾患は伝統的な食生活の下で発症しやすい事がわかった。脳血管疾患は、食の欧米化が進んだ地域、人口密度の高い地域よりも、比較的伝統的な食生活を送っている地域で死亡率が高い。これは伝統的食生活のもとでは食塩の量が多く、食塩の摂取が脳血管疾患の発症につながっていることが原因であると思われる。生活習慣病の発症、そしてその原因となる食生活は地域によって異なる。生活習慣病対策は、地域の実情に合ったものが求められるだろう。